

スペシャルインタビュー



立川 幸治さん

大阪紙業株式会社 代表取締役社長

インタビュアー(イ): 事業系一般廃棄物管理責任者研修会ありがとうございました。立川さんは異色の経歴(病院の総合内科専門医・循環器専門医、経営コンサルタント、投資ファンド起業、名古屋大学医療経営

管理部教授等)をお持ちですね。現在は紙のリサイクルがご職業ですが、前職のときに考えていた「リサイクル」はどのように変化しましたか。

立川さん(立): 以前から、紙のリサイクルは知っていました。しかし、前職では「もったいない」とわかっても行動には移せていませんでした。今は、当然のように紙は捨てなくなりました。我が家では紙以外のものもリサイクルしますから、ほとんどごみゼロです。(笑)

(イ): リサイクルについて、事業所の皆さまや市民の皆さまにどのように伝えることが有効でしょうか？

(立): 研修会でもお話したとおり、意義だけでなくリターンやメリットを知ってもらうことが大切です。ごみもリサイクルにまわせば、**お金**にも変わることはまだまだ知られていません。



(イ): 研修会では、分別が大事とおっしゃってましたね。

(立): 分別はすべてのリサイクルの起点です。正しく分けることでリサイクルに繋がります。

(イ): 古紙は海外(中国)にも運ばれていると聞きました。中国の状況はどうか？

(立): 古紙の国内運賃より、日本から中国への船運賃の方が重量あたり安いという現象が最近では起きています。

さらに中国の製紙会社は最新設備を持ち、実は、今や日本より進んでいます。**シュレッター古紙がリサイクル**にまわり始めたのも、中国の製紙会社で受け入れができるようになったからです。でも、紙をできるだけ何回も再生にまわすためにも、繊維を断ちきってしまうシュレッター処理をせず、機密書類として厳密に情報抹消まで行う、弊社のようなリサイクル専門機密処理会社に是非おまかせ頂きたいです。

(イ): 最後に、立川さんにとって「ごみ減量」とは何か教えていただけますか。

(立): **ごみ減量**は、「**宝探し**」ですね。ごみはゼロにはなりません。でもその中に資源を見つければ見つかるほど、ごみが減ります。これを知れば知るほど、やればやるほど面白くなりますよ。

(イ): ごみをごみとするのか、宝とするのかで大きな差がありますね。本日は、研修会及びインタビューありがとうございました。



大阪紙業で検索 <http://www.osaka-paper.com> CLICK

リサビニュース



平成26年度 事業系一般廃棄物管理責任者研修会を開催しました。

平成26年11月12日(水)に開催した研修会では、「**捨てていませんか？ごみから再生資源を掘り起こす**」をテーマに、米田産業㈱代表取締役社長 米田弘樹さんと大阪紙業㈱代表取締役社長 立川幸治さんをお招きし、ご講演していただきました。



研修会の様子

講演では、米田さんからは収集業者から見たごみの分別やリサイクル、収集ができないごみやリサイクルできるものがごみになっている現状を、立川さんからは、古紙全般、古紙の行方や禁忌品(異物)に関すること、また分別の大切さについてお話をいただきました。

講演会の資料については、豊中市へご連絡いただければ、データ提供いたします。

・ごみ収集許可業者から見るごみの分別とリサイクル
・オフィス古紙リサイクル

	事業系ごみ減量に対し、積極的に実施している取組み(管理責任者研修会アンケートより)
①	ごみの分別と売却
②	リユースの拡大(梱包材・緩衝材)
③	電子化の推進(ペーパーレス化)
④	機密文書リサイクル(溶解処理)



編集後記

仕事場では、コーヒーを飲んでいる方が多いと思います。少しでも事業所のごみ(重さ)を減らす工夫として、コーヒーマーカーで作ったあとの「コーヒークス(フィルター)」に注目してはいかかでしょう。水分が含まれている重さは約150g。これを1日に約4回。月になんと13.2kgの重さ。年間では約158kgになります。水分を含んだまま捨てるのではなく、乾燥させて、ごみの重さを減らしてから排出しましょう。